「二万五千頌般若経」と「瑜伽師地論菩薩地」における空性について

研究生　淺野　秀夫

『瑜伽師地論』「本地分菩薩地」（以下『菩薩地』という。）は、般若経を明瞭に引用することなく、また、その経典名を具体的に特定することなく、これを「空性に相応する諸々の経典」と言い替えた上で、複数の般若経に基づくことを示唆しつつ、空の論理を展開してゆくことを一つの特徴としている。ここでは、取り上げられることの少なかった『二万五千頌般若経』（以下『二万五千頌』という。）の空性に関する所説がどのように『菩薩地』に摂取されてゆくのかを考察する。

『二万五千頌』における空性とは「法が言葉では表現できないこと（dharmāṇām anabhilapyatā）」をいい、それが法の本質である。色等五蘊の法は本来空であるにもかかわらず、言語習慣（vyavahāra）によることで、あたかも実在するかのように振舞うのである。経は、この様子を幻に譬え、名称にすぎないものが実在視されてゆく様を描いている。また、名称は具体的な事象（vastu）を伴うことなく与えられると説き、事象の存在を前提としていないことが確認される。

一方、『菩薩地』における空性とは「法には言葉では表現できない自性があること（nirabhilāpyasvabhāvatā）」をいい、それが法の本質であり、真如である。色等五蘊の法は、言葉では表現できないものの、その言葉を用いた概念設定（prajñapti）の対象となる事象は確実に存在すると説いている。これは、事象なくして概念設定が成されないことを意味し、言語化の根拠としての事象の存在を認めているとも言い替えることができる。

上述のように、両経の説く空性には、「言葉では表現できない」という共通項と、「法が事象に随伴するか否か」という差異が見られる。『二万五千頌』のいう言葉による妄想は『菩薩地』へと継承されるが、その妄想を生じさせる根拠、すなわち言語化の根拠となる事象については、前者が前提としないのに対し、後者では空性を特徴付ける重要な要因として取り上げられている。廣澤隆之氏の研究（「初期唯識思想における空性相応経典の問題」日本仏教学会年報七六号七六頁）によれば、瑜伽行派は、般若経の空性理解が事象の存在をも否定する龍樹の思想へと向かうことを是正し、般若経の正しい理解を促すことを目論み、『菩薩地』を記述したという。その般若経は「空性に相応する諸々の経典」という異名で『菩薩地』に登場するが、同時に「特別な意図（ābhiprāyikārtha）の規定された経典」とも言い替えられる。つまり、般若経を解釈するにあたり、そこに隠された真意を見出そうとする瑜伽行派の姿勢が顕著に見て取れる。これが、『二万五千頌』では前提とされなかった事象そのものを再解釈し、その存在を認める空性理解へと結び付いていったのではないかと考えられる。